

平安期における女性と仏教について

——願文を中心に——

工藤美和子

【抄録】

本論では、平安時代の女性たちと仏教の問題について論じてみたい。その問題を論じる上でこれまで重要とされてきたのが「五障」という言葉である。五障とは、女性ももっている「五つの障害」という意味と考えられてきた。なぜならば、五障は『法華経』に記されている言葉で、従来から、「女は仏になれない、男は仏になれる」という女性差別を意味すると考えられてきたからである。しかし、その問題は、現代社会に横たわる男女間の差異（ジェンダー）を通して論じられている。そのために、平安時代の女性たちが自らをどのように理解していたのかという問題への理解が困難になっている。そこで①仏教経典や教義書に記されている五障という言葉の意味、②平安時代の

願文に記された五障についての再考察。以上の二点を中心に、平安時代の女性たちが担っていた仏教的な役割について考えてみたい。

キーワード…女性、仏教、誓願

はじめに

元慶七年（八八三）三月、一人の女性が亡き両親の供養と自らの逆修のために『法華経』講説の法会を開き、文人官僚菅原道真（八四五―九〇三）に願文の作成を依頼した。①「式部大輔藤原朝臣室家命婦の為の逆修の功德の願文」（『菅家文章』巻第十二）と題された願文の中で、彼女は自らの孤独な身の上を

「道の三塗、身の五障」^①と述べ、仏の救済を願った。

「三塗」は三悪道（畜生・餓鬼・地獄）、「五障」は悟りへの障害を意味するが、この五障をめぐって、仏教と女性という観点から仏教学・歴史学・社会学など様々な分野で議論がなされてきた。なぜならば五障は、『法華経』提婆達多品では、女性がない五つの位（梵天・帝釈天・魔王・転輪聖王・仏）を指す言葉として使われているため、仏教は女性を救済の対象とはしないという女性差別観が内包されていると解釈されてきたからである。また提婆達多品には、女性が男性に変成することと悟りを得たと記されていることから、女身のままでは成仏できないという、成仏から疎外される女性像を描いていると考えられてきた。

日本では仏教伝来後、女性仏教者による積極的な救済活動が行われてきたが、時代が下るにつれ家父長的家族観や女性不浄観が成立し、女性は育児や家事に携わるべきという儒教的道徳観の下に置かれ、積極的に仏教に関わる機会が失われていったと理解されてきた。その根拠となったのが、『法華経』提婆達多品の五障や変成男子といった考えであった。

一方、仏教は女性を救済対象として認めているという議論もなされていた。しかし多くは、教団・祖師・教学が女性には五障を備えているとはしながらも、最終的には仏教は女性の成仏を

認めているという見方、つまり五障という女性蔑視観を利用することによって、女性をたくみに教団に取り込んできたという評価が大部分を占めていた。^②

ところが、「式部大輔藤原朝臣室家命婦の為の逆修の功德の願文」のような平安期の願文に目を通すと、女性自身が、五障や変成男子後の成仏をはじめとした女性蔑視と見なされていた文言を積極的に用いて、仏への救済を願っていることに気がつかざるをえない。ではなぜ女性自身が女性差別的とされてきた文言を用いたのだろうか。言い換えるならば、五障は果たして女性差別を意味するのだろうか。過去の人々は、男女間には成仏を得る過程で差異があり、また女性自身も自ら男性に比べて劣位であると捉えていたのだろうか。

そこで本論では、女性と仏教をめぐる議論の中でその根拠となっている五障の仏教的意味を明らかにするとともに、平安期の願文に記された五障の意味について考察したい。また、女性自身が五障を自覚することによって、女性の仏教的役割にどのような変化が生じたのかについても考察を試みたい。

第一章 仏典にみる五障観

②貞観十一年（八六九）九月二十五日「安氏諸大夫先妣の為

の法華会を修する願文」(『菅家文章』巻第十一)は、願主安倍宗行が貞観九年(八六七)に死去した母多治氏のために『法華經』書写と講説を行った際に作成されたものである。作成は菅原道真に依頼された。

弟子先妣多治氏、平生より弟子等に謂ひて曰く、夫れ生死は不住なり。人の死を悪むが為に其の輪廻を輟めず。苦樂は無常なり、世の樂を欲うが為に其の分斷を留めず。又生の生たる所以や、天地に始まり、父母に終う。報施量るべからず、恩愛斷つこと能わず。是を以て余れ將に身口を節して以て十方の衆僧を供養し、肌膚を刻して以て一乘の妙典を莊嚴せんとす。(中略)我昔報恩の為に宿心有り。汝先づ之を識れ。汝今老を祝うが為に新しき慮り有り。我既に聞けり。事須く心を善報に帰し、道を真如に皈るべし。我汝に因て以て我が心を遂げん。汝我に因て以て汝が志を言えと。(中略)伏して原ぬるに、先妣尊体乖和したまいしより始め、終に温顔の冷きに就きたまうに至るまで、遺訓存せり。(中略)先妣昔利他を以て意と為したまいき。今則ち自利を兼ねたまうべし。弟子始めに生を事うるを以て宗と為しき。今則ち死に事うるを專一とす。然れば則ち元を元め本に本づく。先妣の祖孝、速に菩提に証し、有親有尊、弟子の先君、共に正覚を成さんことを。乃至天の有

「生、生の無骨、地の含氣、氣の不形、不親不疎、同じく福果を攀き、大と無く小と無く、共に良因を受けん。

願文は、母が一切衆生(前世の父母)に対し、『法華經』書写・講説という方法で報恩を行いたいという願意を持つていたことが、母子の対話の中で語られている。母の考える真の報恩とは、儒教的な方法ではなく、仏教的な利他行によってかなえられるものであった^③。しかし母の死によつて母は現世で利他行を行うことが不可能となつたので、子が母の利他行を繼承することになる。母と子の対話という形式で記されるのは、道真が作成する願文の大きな特色といえるが、このような叙述によつて、母は子に利他行を行わせ悟りへ向かわせる役割があるのでと示唆されている。

一方、五障が記された願文も作成された。それが上述した①「式部大輔藤原朝臣室家命婦の為の逆修の功德の願文」である。この願文は「藤原朝臣某子」という女性が、亡き父母それぞれのために『法華經』二部を書写するとともに、自らの逆修を行ったときものである。

弟子重ねて願を發して曰く、生有り、老有り、病有り、死有り。山を抜き日を倒にすとも、地逃るるは無し。弟子祀を閨房に歴たり、脂粉の春早く去りぬ。籌を帷帳に運らせり、綺羅の暁留め難し。毎に前途を想うに、言泗俱に下る。

將に後事を属せんとするに、一も生ずる所無し。道の三塗、身の五障、誠に哀れむべし。是故に我今唯一心を發し、三宝に帰依す。（中略）猗歎、奉行耳に盈てるは、常樂我淨に非ざるは無し。隨喜心に欣ぶは、皆是れ菩提薩埵。

この願文は、仏敎書以外で五障が記された史料としては初見にあたる。願主は父母の成仏のために『法華經』書写・講説を誓うが、自らは子がいないことで②の願文のような親から子への利他行の繼承が不可能となる。そこで子が行うべき報恩としての仏敎的作善を自らの「逆修」として行おうとしているのである。利他行の繼承者を持ちえなかったことを願主は、「道の三塗、身の五障」であると仏に対して懺悔しているが、それによって「唯一心を發し、三宝に帰依」し、自らも悟りを得ることができると同時に、「奉行耳に盈てるは、常樂我淨に非ざるは無し。隨喜心に欣ぶは、皆是れ菩提薩埵」と、法会の參集者に対して利他行の繼承が呼びかけられている⁴。

ところで五障という言葉は、インド成立の阿含經典や大乘經典では、經典によつて若干異なるものの、悟りの妨げという意味では共通している。たとえば、初期仏敎經典の『雜阿含經』卷第二十六には、「如是我聞。一時仏住舍衛國祇樹給孤獨園。爾時世尊告諸比丘、有五障五蓋煩惱於心、能羸智慧。障闕之分、非明非正覺、不轉趣涅槃。何等為五。謂貪欲蓋、瞋蓋、睡眠蓋、

掉悔蓋、疑蓋。如此五蓋、為覆為蓋煩惱於心、令智慧羸、為障闕分、非明非正覺、不轉趣涅槃、若七覺支、非覆非蓋不惱於心、增長智慧、為明為正覺轉趣涅槃⁵」と記され、「五障五蓋」が「貪欲蓋（むさぼり）・瞋蓋（怒りや憎しみ）・睡眠蓋（心の消沈）・掉悔蓋（心の浮つきと悔恨）・疑蓋（仏道に対する疑惑）」といった心の散乱する状態や悟りに対する疑いを意味している。この「五障五蓋」を減する方法として「世尊」は、「七覺支」（悟りへと導く七つの要素）によつて「智慧」が増長され「涅槃」へと赴くことができるのだと説いているが、「五障五蓋」と記されていることから「五障」と「五蓋」は同意であると捉えられている。

インド成立の初期大乘經典でも、五障の意味は明確に記されている。唐菩提流支訳『大宝積經』卷第三には、「迦葉、在家菩薩有三種修、能於菩提而作利益。何等為三。為一切智故深生愛樂、不墮本業堅持五戒。具此三支能成六法。何等為六。謂得聖處、不癩不吃不聾不失聰聽、身變端嚴速得深信、於甚深法不生怖畏。隨所聞法不用功勞、而能領解速得不退。於此六法應當善知、有五障轉、何等為五。謂離間語、一切妄語、意樂不成、心懷嫉妬、耽著諸欲、如是五法為障礙⁶」と記され、在家の菩薩には三種の修めるべき行があり、それによつて「六法」を得て「五障」を除くことができるとされている。この場合の「五

「障」とは、「離間語（二枚舌、十悪の一つ）・妄語・意樂（心構えの不成）・嫉妬・耽著諸欲（欲望に耽る）」の五事項、すなわち身・口・意の三業が作りだす十悪を「五障」という言葉で表している。

瑜伽行派の代表的典籍である玄奘訳『瑜伽師地論』巻第九十八にも五障について、「爾時応知五障礙法。一者於其外縁其心散乱、二者入出息転有所艱難、三者掉挙悪作纏現在前、四者昏沈睡眠纏現在前、五者染与道俗共相雜住。如是五法於未得定欲求心定、及得定已倍復增長当知一切能為障礙」と述べ、禪定を実践する時に生じる瞑想の妨げ、たとえば散乱心や睡眠などが「五障礙」であると理解されている。

以上のように、初期仏教経典や大乘仏典では、各教派によって意味は異なるものの、悟りを妨げる迷いや煩惱を意味するという理解が共有されていた。

一方、『法華経』提婆達多品に記される五障は、他の経典とはいささか異なった用法で記されている。

提婆達多品の前半部は、釈尊の殺害を目論んだ提婆達多をめぐる悪人成仏説、後半部で釈尊説法の場に竜女の娘竜女が登場する。竜女は海中において文殊菩薩が説く『法華経』の教えを聞くことよって即身成仏を遂げたことが明かされる。ところが竜女の成仏について疑念を抱いた小乗の修行者智積菩薩と声

聞の仏弟子舍利弗が登場し、「われ釈迦如来を見たてまつるに、無量劫において、難行し、苦行し、功を積み、徳を累ねて、菩薩の道を求むること、未だ曾て止息したまわず。（中略）その時、舍利弗は、竜女に語りて言わく、汝は、久しからずして、無上道を得たりと謂えるも、この事は信じ難し。所以はいかん。女身は垢穢にして、これ法器に非ず。云何んぞ能く、無上菩提を得ん。仏道は懸曠にして無量劫を逕て、勤苦して行を積み、

具に諸度を修して、然して後、乃ち成ずるなり。又、女人の身には、猶、五つの障あり。一には梵天王と作ることを得ず、二には帝釈、三には魔王、四には転輪聖王、五には仏身なり。云何んぞ、女身、速かに成仏することを得ん。」と語る。竜女が現身のままに即身成仏を遂げたことについて、智積菩薩は、成仏は途方もなく長い期間の修行を必要とし、釈尊以外に得る者はいないこと、一方舍利弗は、竜女は女性であるから梵天王・帝釈・魔王・転輪聖王・仏になれないと異議を唱えたという。

ところが『法華経』は続けて、「当時の衆会は、皆、竜女の、忽然の間に變じて男子と成り、菩薩の行を具して、すなわち南方の無垢世界に往き、宝蓮華に坐して、等正覚を成じ。三十二相・八十種好ありて、普く十方の一切衆生のために、妙法を演説するを見たり。その時、娑婆世界の菩薩と声聞と天・竜の八部と人と非人とは、皆、遙かに彼の竜女の、成仏して普く時の

会の人・天のために法を説くを見、心、大いに歡喜して悉く遙かに敬礼せり。無量の衆生は、法を聞いて解悟り、不退転を得、無量の衆生は、道の記を受くることを得たり。無垢世界は、六反に震動し、娑婆世界の三千の衆生は、不退の地に住し、三千の衆生は菩提心を発して、記を受くることを得たり。智積菩薩と及び舍利弗と一切の衆会とは、默然として信受せり。」と説かれる。

竜女は、「変じて男子」となり「南方の無垢世界」へ赴き、蓮華坐で悟りを開き、「三十二相・八十種好」の仏の相好を表し法を説いたと記されている。さらに「娑婆世界の菩薩と声聞と天・竜の八部と人と非人」が、竜女が竜女の姿のまま「成仏して普く時の会の人・天のために法を説くを見、心、大いに歡喜して悉く遙かに敬礼」し、「無量の衆生」は「法を聞いて解悟り、不退転を得」「道の記を受」けたという記述が続く。それに対して「南方の無垢世界」は、「六反に震動」しただけであった。

つまり、智積菩薩や舍利弗が集っていた場に居並んだ衆生は、変成男子し仏の相好を表した竜女を目撃したが、「娑婆世界の菩薩と声聞と天・竜の八部と人と非人」「無量の衆生」は、竜女が竜女の姿のまま成仏したのを目撃したことになる。また彼らは、竜女によって「不退転」の地位に達し、必ず悟りに

たるといふ授記を受けることになっているが、智積菩薩や舍利弗たちは仏の授記は得られてはいない。それは、変成男子して成仏を遂げた竜女と、竜女の姿のまま成仏したという、二つの異なる成仏の様が同時に現れたことを意味している。

近年、仏教学の立場から『法華経』の再検討が行われ、提婆達多品のテーマは、釈尊以外には悟りを得ること者はいないと考える智積菩薩と、「男は仏になれる、女は仏にならない」という小乗的な男女観（男女の差異を實體視する二者択一的な先入観）に固執する舍利弗が成仏できるかどうかを問題にしていることが指摘されている⁹⁾。空の立場を主張する初期大乘仏教教団によって、智積と舍利弗の先入観が否定され、彼らを誤った見識から解放させることが目的だったといえるだろう。誤った見方から解放されなければ彼らの成仏は不可能なのである。智積や舍利弗自身が有している執着によって生じる問題が提婆達多品の主題とするならば、舍利弗の持つ女性に対する間違った五つの見識が、五つの煩惱＝五障ということになる。

中国と日本の『法華経』註釈書について論究された兼子鐵秀氏や大久保良峻氏によると、六世紀から七世紀までに編纂された註釈書には、女性が仏になれないということについてはほとんど言及されていないと指摘されている¹⁰⁾。

たとえば、『法華経』の代表的註釈書である『法華玄義』を

著した智顛（五三八～五九八）は、『法華玄義』巻第一上で「就通作七番共解。一標章、二引証、三生起、四開合、五料簡、六觀心、七会異、標章令易憶持起念心故。引証捩仏語起信心故。生起使不雜乱起定心故、開合料簡会異等起慧心故。觀心即聞即行起精進心故。五心立成五根、排五障成五力、乃至入三脫門」と記している。

智顛の『法華玄義』を註釈した湛然（七一～七八二）の『法華玄義釈籤』巻第一によると、「以七章依於五心。五心若立如草木有根莖幹則立故心立名根。既五心名根根必至力。言排障者如信解品云、無有欺怠瞋恨怨言。欺為信障怠為進障瞋為念障恨為定障怨為慧障。若根增長能破五障故名為力。既成根力、必具覺道以開三脫故云乃至。以小準大亦應可知」とされ、智顛が『法華經』信解品の「汝常に作す時、欺怠瞋恨怨言有ること無く」という記述の中の「欺・怠・瞋・恨・怨」を、「五障」として『法華玄義』の中で挙げていと述べている。さらに「欺・怠・瞋・恨・怨」の「五障」を自覚することで菩提心が生じ、即身成仏が得られるのだと理解されている。そのように理解されるならば、『法華玄義』では「五根」（信根・精進根・念根・定根・慧根）を増長させる「五力」（信力・精進力・念力・定力・慧力）によって、「欺・怠・瞋・恨・怨」が排除できるとしている。つまり、仏道修行の妨げとなる「欺・怠・

瞋・恨・怨」が五障であると天台教学では理解されていたことになる。

智顛や湛然の『法華經』解釈は、日本天台の最澄（七六七～八二二）・義真（七八一～八三三）・円珍（八一四～八九一）にも大きな影響を及ぼした。

最澄は、『法華秀句』巻下の中で、『法華經』提婆達多品に竜女成仏を目の当たりにした「智積菩薩と及び舍利弗と一切の衆会とは、黙然として信受せり」と記されていることについて、「龍女成仏所化巨多、法華之力今日已顕。一切衆会皆悉得見。是故默然信受。他宗所依經無如是信受。天台法華宗有如是信受即身成仏化導義寧不勝於他宗哉」と、他宗と比較し天台の教学の優位性の論拠として記している。

初代天台座主の義真も、『天台法華宗義集』の中で、「問、五停心者何等、答、一慈停心、二数息停心、三因縁停心、四不淨停心、五念仏停心也。問、此五停心治幾障耶。答、对治五障、慈停心对治嫉妬、数息停心治覺観、因縁治癡、不淨治貪、念仏治障道。」と記し、「五停心」（慈停心・数息停心・因縁停心・不淨停心・念仏停心）が「嫉妬・覺観・癡・貪・障道」といった「五障」それぞれに対応し、滅することができる」と述べている。一方、最澄と同時期に入唐した空海（七七四～八三五）は、真言密教を日本に伝えたが、その著書である『金剛般若波羅蜜

多経開題』に、「能行此三昧之人早攀五障雲超三重妄執¹⁵⁾」と記し、「五障雲」「三重妄執」を煩惱の意味で用いている。

第二章 『金光明最勝王経玄枢』における 女性の仏教的役割

奈良・平安期にかけて護国経典として重要視された『金光明最勝王経』の注釈書『金光明最勝王経玄枢』十卷（以下『玄枢』と略記す）は、三論宗の学僧で元興寺に住していた願暁（生年未詳く八七四）が著した。内容は、中国の三論の祖吉蔵（五四九く六二三）の三論一乗の立場の学説を根拠として、撰論宗の祖真諦（四九九く五六九）、三論三乗の慧沼（六四九く七二四）、元暁（六一七く六八六）といった三論教学の学僧が著した数多くの注釈書を引用し構成されている。また『玄枢』序は、菅原道真の父菅原是善（八一二く八八〇）に依頼され、「斯乃金光理窟之妙鍵、最勝法門之玄枢、故名曰玄枢¹⁶⁾」と記している。

『玄枢』巻第八は、『金光明最勝王経』巻第五依空滿願品の注釈であるが、その中で、仏道修行における女性の重要な役割について興味深い内容が記されている。

『金光明最勝王経』巻第五依空滿願品は、仏となった「如意

宝光耀善女人」と衆生の代表として「如意宝光耀善女人」の説法を聴聞する梵天との対話を軸に展開している。

それによると、釈尊の説法を聴聞した「如意宝光耀善女人」は、「菩提行」を修学したいと述べる。すると、梵天が善女人に対し、仏の説法は難解で奥深いものであり、その教説を理解することは困難であると異議を唱えた。それに対し善女人は、「大梵王如仏所説。實是甚深一切異生、不解其義。是聖境界微妙難知、若使我今依於此法得安樂住、是実語者、願令一切五濁惡世無量無數無辺衆生、皆得金色三十二相、非男非女、坐宝蓮花、受無量樂、雨天妙花、諸天音樂不鼓自鳴、一切供養皆悉具足。時善女人説是語已、一切五濁惡世所有衆生、皆悉金色、具大人相、非男非女。坐宝蓮花受無量樂、猶如他化自在天宮無諸惡道。宝樹行列、七宝蓮花遍滿世界、又雨七宝上妙天花、作天伎樂。如意宝光耀善女人、即轉女身作梵天身¹⁷⁾。」と述べ、善女人はすでに「安樂住」を得たことを語る。これが真実ならばその証として、全ての衆生を五濁惡世から救済し、「男に非ず女に非ず」という差異のない悟りへと至らしめ、世界が仏界となるであろうと述べる。そして善女人が語り終わるや、世界は仏界へと変化したという。また善女人自らその身を転じて梵天の姿へと変化した。

この語を受け梵天は、「無量の梵衆、帝釈、四王及び諸の菓

又」と共に、『金光明最勝王經』が全ての世界に流通すれば、国土に飢饉や戦がなくなり、衆生が安穩に暮らすことにつながる。また、国土安穩だけではなく人々が「無上正等菩提」を成すであろうこと、それこそが『金光明最勝王經』の最大の功德であると語り、經典を護持することを誓う。

一方、『玄枢』には、「如意宝光耀善女人」が仏であるにも関わらず女身の姿のまま仏法を説くこと理由、さらに女性が佛教弘通に重要な関わりがあることについて次のような解釈を示している。「名有四義。一自利利他令心満足、故云如意。二自撰善功德可愛如宝。三自不為煩惱汚故云光。四能除他煩惱故云耀也。（暁莊沼興皆潤飾之） 天女者、本云善女人、作女形有五義、一於因中不生倒心、二於果無疑心、此二種自利、三於衆生中生慈悲心、此一種為利他、四願樂菩提通自他、言女人者、一為他下心衆生令其忿慨修道、二息他生輕劣心言女人無堪、三欲破外道明女人不得作男、男不得作女、四欲明依法不依人、五示理平等、修者皆得、故菩薩示為女形也。（暁興即取、莊取初三、沼総初二、故生長他善故曰女）、隋加云、又女身有五不為、即述法花五障、又度女人出家有五過失、一損五百年正法、二若不度女人、諸天恭敬出家人如事火法、三若不度女、世人皆以髮布地令比丘踐上而過、四不度女、世間当作一切食領四道頭供我弟子、五若不度女、世間当作種種四事供養衆僧也。天者略也。」

『玄枢』によると、仏となった「如意宝光耀」の名前の由来には「四義」とあるという。一つは「自利利他の心満足せしむ」故に「如意」であり、二は「自ら善功德を撰し愛すべし」であるから「宝」であり、三は「自ら煩惱の為汚れず」であるから「光」であり、四は「能く他の煩惱を除く」故に「耀」である。自利利他のために、自らは煩惱に染まることなく、また他者の煩惱を除くことで他者を悟りへと至らしめる働きをもつことが「如意宝光耀」という名前の由来であったことが明かされる。しかし、女性の姿のままでは何故なのかという疑問が生じる。その疑問について『玄枢』は、女性の姿を取るのには、女身には優れた「五義」＝「一因中に於いて倒心を生ぜず」「二果に於いて疑心無し」「三衆生の中に於いて慈悲心を生ず」「四菩提に願樂し自他に通ず」「五理平等、修者皆得るを示す」が備わっているからだという。

「一因中に於いて倒心を生ぜず」とは、女性は間違った考えである「倒心」を起こさないと意味であり、「二果に於いて疑心無し」とは、疑いの心が女性には起こらないという意味である。この二義は、仏教的な解釈によるならば、女性は成仏への疑惑が生じないということになる。また『玄枢』は、「此の二種は自利」であると、菩薩の自利行に必要なことであると解釈している。

「三衆生の中に於いて慈悲心を生ず」とは、女性は慈悲心を備えている存在であり、その慈悲によって衆生に仏法を説き教化することが可能になると述べる。これは、「此一種は利他」とあることから、慈悲が菩薩にとつての利他行として理解されている。

「四菩提に願樂し自他に通ず」は、女性は喜んで菩提心を起こすという意味であるが、「女人と言うは」と続け、女性がなぜ菩提心を生ずるのかを以下四項目にわたり説明する。

『玄枢』によれば、①「他の下心衆生其の忿慨して道を修せしめん」とは、女性は劣位の衆生（「下心衆生」）を導く役割があるという。②「他の輕劣の心を生じ女人堪ゆるなしと言うを息む」は、女性が「長期間の修行に耐えることが出来ない」という間違つた考え（「他の輕劣の心を生じ」）を持つ衆生にその考えを改めさせる役割を有していることを意味する。③「外道女人男を作ることを得ず。男は女と作ることを得ずを明かし破さんと欲す」とは、女性が「女は男になれないし、男も女になれない」と主張するバラモン（「外道」）の考えを正すことが可能な存在である。④「法に依り人に依らざるを明かさんと欲す」は、人に惑わされないという優れた特質が女性には備わっていることを示す。その特質を備えているからこそ女性は悟るを目指すという仏道修行者の中でも非常に優れた存在なのだ

され、「五理平等、修者皆得るを示す」と、誰に対しても仏法が平等であることを示す役割を女性がもっていると理解される。『玄枢』は、これらの「五義」を「隋加云く」と、吉藏の論に基づいて解釈している。すなわち吉藏が、「五義」を「又女身は五不為有り」と理解し、さらに「即ち法花は五障を述ぶ」と、『法華經』では五障という言葉で説明していると述べているのを参照しながら、『玄枢』では「五障」と「五義」は同じ意味を有していた言葉であると理解していたことになる。

つまり「五義」とは、女性は悟りの妨げとなる煩惱が生じないという意味なのである。それは、智顛の『法華經』解釈、特に信解品の解釈を通じて理解された五障觀に基づいており、それは吉藏をはじめとする中国や日本の天台以外の教派でも受け入れられていたと考えられる。

『玄枢』では続けて、女性の出家を認めたらば「一五百年正法を損」うが、「二若し女人を度せざれば、諸天出家人を恭敬すること火法の如し、三若し女を度せざれば、世人皆髮を以て地に布し比丘をして上を踐みて過ごさしむ、四女を度せざれば、世間当に一切の食領を作り四道頭の我が弟子に供うべし、五若し女を度せざれば、世間当に種種の四事を作り衆僧を供養すべしなり」という「五事」が損なわれることがないと述べている。

女性が出家をしなければ損なわれない五つの事項とは、正法が五百年延長されること、諸々の天人は出家者を敬うであろうこと、世間の人々は出家者を供養するであろうこと等である。これは一見すると女性の出家を認めないという、仏教教団側の女性排除にも見て取れるだろう。しかし『玄枢』が、女性の出家を認めないと記した背景には、女性が衆生に対して行っていた利他行を遂行することの重要性を認めていたのである。

たとえば、「三若し女を度せざれば、世人皆髮を以て地に布し比丘をして上を踐みて過ごさしむ」は、『仏本行集経』のデーパンカラ仏（燃燈仏）の授記の話を基としている。この話は、四無数十萬劫という遠い過去に、釈尊の前生である修行中のバラモン僧スメーダが、仏に出会い、五茎の花を捧げ、自分の長い頭髪を泥土に敷きその上を仏に歩ませ供養した。すると仏は、スメーダに対し、未来に釈尊という名のブツダになるであろうという授記を与えたという内容である。

すなわち、釈尊の前生譚を配することによって、女性がスメーダのように仏を敬い供養することで、釈尊と同じように悟りへと至ることができる存在であることを示唆している。それは女性が在家のままであることで、世間の人々が仏や仏道修行者に対して釈尊が前世で行ったように供養することを学ぶであろうこと、反面、女性が出家をしてしまうと、人々は仏や仏道

修行者への供養を女性より教えられる機会を逸し、供養が行われなくなることを意味する。そのために、女性が在家者のままでいることが望まれたのであるが、女性が出家をするか否かによって、女性以外の人々が仏の教えに出会い、供養することが可能となるか否かが決定されるのだという興味深い内容となっており、在家主義の大乗仏教のあり方に関して重大な問題をはらむことになる。

『玄枢』は、女性の出家を認めてしまうことは、仏法や仏道修行の方法が衆生に伝わらないことにつながると主張するが、それは女性が仏（三宝）を供養する役割を担っていると同時に、他の人々を悟りへと導くという先導者というであるという積極的な評価がなされていたことを伺わせる。このような女性が仏道修行に果たす役割は、上述した②「安氏諸大夫先妣の為の法華会を修する願文」の中の、母と子との関係に投影されていることも十分推測できる。

なぜならば、『玄枢』の序文は道真の父是善が草しており、『玄枢』の内容も道真に伝わっていたと考えられるからである。道真自身も、円仁『顕揚大戒論』序文を著しているが、この序文は最初は善が依頼されていたものを、是善より命ぜられた道真によって記されたものである。序文を草するためにはその内容は勿論のこと、基本的な仏教教義や天台教学について熟知し

ている必要がある。そのため仏敎における五障観の理解や女性の仏敎的役割の敎義も当然理解されていただろうし、その敎義は法会を通じて人々に伝えられ、在家社会へと受容されていたと考えられるのである。

第三章 一〇世紀から一二世紀の願文にみる

女人成仏

以上のように、經典に記されていた一見すると女性蔑視的文言（たとえば五障や変成男子）は、仏敎による女性差別を意味するものではなかった。五障は修行を妨げる障害や煩惱という意味で一貫しており、その言葉が用いられるのは、真理の完成者である仏に対し自らは未完成な存在（煩惱を有する者）であることを懺悔するために必要であった。と同時に、五障がもつ童女の即身成仏を想起させる意味に着目したと考えられる。また女性が、人々の利他行を主導する役割を有していることも願文を通して在家社会に認知され、社会へと広められ、やがて女性⇨菩薩の化身という考えが周知されるようになっていく。

③寛和元年（九八五）閏八月二日「大納言藤原卿息女女御の為の四十九日の願文」（『本朝文粹』卷第十四）は、花山天皇女御藤原祇子（藤原為光女）の四十九日追善に際し、文人官僚慶

滋保胤（生年未詳→一〇〇二）に依頼し作成された。法会では法華曼荼羅の図絵と『法華経』等の經典書写供養が行われた。

弟子に一の息女有り。最も鍾愛する所なり。（中略）生ずる所の功德の功德、累業を銷滅せん。ゆめ人中の雲雨と為ること莫れ、自愛して天上の快樂を受けざれ。又其れ此の五障を奈何せんと欲す、其れ彼の五衰を奈何せんと欲す。

弟子早く幽霊を引き、偏に極樂に在らしめん。弥陀尊の蓮台を設くるや、上品を望み、又下品を仰ぐ。法華経の仏果を説くや、我が女をして龍女に異ならざらしめん。彼は即身なり是は後身なり。¹⁹⁾

祇子の父親である願主の為光は、祇子が死後に「人中の雲雨」⇨人道や、「天上の快樂」⇨天道に転生することがないよう願う。なぜならば、それぞれ「五障」「五衰」が伴うからだという。ところが為光が『法華経』に目を通したところ、「我が女をして龍女に異ならざらしめん」と、祇子が童女と同じように即身成仏を遂げていたことがついたと述べられる。「五障」は「人中の雲雨」と対句であるから煩惱という意味であることは明らかであろう。すなわち、人道か天道に生まれたのではないかと祇子の後世を案じていた為光の考えは、誤った認識であったことが示唆されているのである。

同じく④寛和元年六月十七日「二品長公主の為の四十九日御

願文」(『本朝文粹』卷第十四・作成慶滋保胤)では、女性が菩薩の化身であると記している。

二品長公主、今年五月、忽ち以て入滅す。(中略)素意久しく七覚を期し、長秋宮の月潔からざるにあらざるに、宿望偏に三明に在り。恩寵を受くるを以て榮と為さず、唯だ俗塵を逃るを以て志と為す。嗟呼、晨昏誦する所は提婆品、造次念ずる所は弥陀尊。去る月十九日、故延暦寺座主大僧正良源を請い、戒師と為し、終に以て道に入る。(中略)追て往事を思うに。良に化人なるべし。知らず妙音暫く自界より来たりて仮に後宮と為るか、又知らず観音随類を度せんと欲せんが為に化身を現ずるか。(中略)公主臨終の間、西面して凡に憑り、寸心乱れず、十念休むこと無し。便ち是れ綺窓瞑目の時は、寧ろ蓮台結跏の日にあらずや。定めて知ぬ中有を経ずして、直に西方に至ることを。(中略)今日の善業、上は則ち新仏の瓔珞の末光を増加し、下は且群生輪廻の苦縁を解脱せしめんことを。

「二品長公主」とは、円融天皇妃尊子内親王(九六六―九八五)のこと。願文には尊子が生前、「七覚」「三明」を願ひ、『法華経』提婆達多品を誦誦し念仏を唱えていたと述べられる。尊子の生前の様子について願文は、『法華経』に説かれている妙音菩薩か観音菩薩¹¹不退転の菩薩の化身であって、後宮の

人々に仏道修行を行わせるために后妃の姿となって出現し、菩薩としての誓願に基づいた仏道修行を行っていたと理解されている。菩薩の化身である尊子に対し願主は、尊子の菩薩としての利他行が終わり「新仏」になることを願うが、尊子が菩薩の化身であるならば、生前の提婆達多品誦誦や念仏は、尊子自身のために行われていたのではなく、竜女の即身成仏や往生業によつて人々が悟りへと至ることができるとを教えるための利他行であつたと理解されていたことになる。²⁰⁾

院政期を代表する文人官僚大江匡房(一〇四四―一一一一)作成の願文が編纂された『江都督納言願文集』(『江都督』と略記)は、巻五・六を中心に女性に関する願文が数多く収載されている。その内一二篇(女性願主八篇・男性願主四篇)に「五障」が記され、また「竜女」も六篇(女性願主のみ)に記されている。なお、女性願主の場合、願主自身が自ら五障を備えており、竜女と同等であると述べた内容が多い。また男性願主は全て匡房を願主として作成された願文にだけ五障が使われている。

⑤承保四年(一〇七七)五月十八日「美作守匡房亡室の作善」(巻六)

ゆめ陽台に向かいて朝暮の雲雨と為ること莫れ。自愛して亦下界に来たりて綺羅の三千に混ざること莫れ。宜しく五

障の家を出でて速やかに一実の境に遷らん。⁽²⁾

⑥応徳元年（一〇八四）八月「女弟子某氏（前大式頭家卿室逆修）敬白」（卷五）

伏して惟れば厭うべきは三界の身なり。求むべきは一実の道なり。（中略）弟子五障の雲恨を遺す。七句の雪頭に滿てり。

⑦応徳三年（一〇八六）十月十一日「讃岐前司室家の多宝塔」（卷五）

側に聞く、止観の羽翼を刷い、真如の虚空に至ることは、雁塔の力に若かず。五障の暁雲を破り、三惑の暗夜を照らすことは、月輪の光に過ぎたるはなし。

⑧天永元年（一一一〇）十一月三十日「頭季卿室の千日講の結願の願文」（卷五）

日毎に妙法蓮華經一部八卷・開結二經・阿弥陀經・般若心經一卷・千部の外題を写し奉る。一身自ら書す。婦女の堪えざるの性を以て、究竟難解の文を書す。（中略）夫れ化他の道還りて我に資す。自業の果將に誰に属せんとす。一切衆生の貪愛を除いて、我秋胡陰氏の簾潔を得ん。一切衆生の瞋恚を除いて、我莊姜嫫大任の慈忍を得ん。一切衆生の愚痴を罷めて、我龍女釈女の智慧を得ん。一切衆生の輪廻を罷めて、我妙覺等覺の極位を得ん。（中略）弟子五障

の雲重しと雖も、証入を無垢界の正覺に望む。三業の塵深しと雖も、払拭を有頂天の成道に期す。

⑤は、匡房を願主として亡き妻のために忌日法会を開いた時に作成された。「朝暮の雲雨」「綺羅の三千」「五障の家」という言葉で娑婆世界を表し、妻がそこに転生することなく「一実の境」と表された悟りに赴くようにと願われている。

⑥は、願主の現在の状況が「三界の身」「五障の雲」と記される。「五障の雲」は、上述した空海の『金剛般若波羅蜜多經開題』で記されているが、願主は造仏・經典書写・講説といった『法華經』に説かれている仏道修行を行うことで、「一実の道」へ向かうと理解される。

⑦は、「止観」の修行法を成就する前提として、多宝塔建立を行うことによって「五障の暁雲」「三惑の暗夜」を除去したいとしている。

⑧は、經典書写は「婦女の堪えざる」行為であるが、經典書写によって一切衆生の「貪愛・瞋恚・愚痴」の三毒が除かれ、「輪廻」から脱し、三毒が除かれた衆生は「簾潔・慈忍・龍女釈女の智慧・妙覺等覺の極位」を得ることができると述べる。願主は自ら「五障の雲」「三業の塵」を負った身であるが、その自覚によって「無垢界の正覺」「有頂天の成道」へとつながるとされる。「無垢界の正覺」は、『法華經』提婆達多品の「南

方無垢世界」を指している。

一二世紀半ば以降に作成された願文でも、五障は積極的に用いられている。

⑨安元元年（一一七七）七月五日「高倉天皇前建春門院の奉為に法華八講を修せらる御願文」（『本朝文集』巻第六十・願主高倉天皇・作成藤原永範）は、高倉天皇の生母建春門院（平滋子）（一一四二―一一七六）の追善法会にて作成された。

仰ぎ願わくは此の惠業を以て、菩提に資し奉る。況んや前院当初平生の時、深く仏界に帰す。寢疾大漸の刻、遂に禪尼と為る。戒急乗急の善兼該す、等覚妙覚の位豈疑わん。然れば則ち五障の雲翳忽ち晴れ、暁を開き明を増す。一円の月輪新たに照らし、昏を速やかにし闇を除く。嗟呼昔秋尊の摩耶に報ずるや、神乳丹果の唇に入る。今眇身の尊儀を訪ぬるや、真跡を黄金の字に顕す。聖を去ること遠しと雖も、至孝惟れ同じ者か。⁽²²⁾

建春門院は平生より仏教に帰依し出家を遂げていたことを述べ、その死によって「等覚妙覚の位」にあるとともに、「五障の雲」が除かれ、悟りへと至る（暁を開き明を増す）「一円の月輪」とされている。また同じ法会で作成された「同呪願文」（『本朝文集』巻第六十）では、

牟尼教主、名号を聞く人、凡夫の形を以て、更に菩薩と称

す、法華の妙理、敬受持徒す。婦女の身を以て、即ち正覚を唱う。

と記され、生前の建春門院は、在家者の女性の姿ではあるが、実は菩薩として利他行を行っていたのだと述べられる。そして「婦女の身を以て、即ち正覚を唱」と、女身のままで悟りを得た後に、新たな利他行が開始されたことが明かされている。

以上のように、願文には、五障＝悟りの妨げという理解や、『玄枢』に代表されるような女性の衆生を導く主導的な役割について記されている。このような考えがどのように在家社会に受容されたのかについては定かではない。しかし、『玄枢』序文を草した菅原是善や、円仁『顕揚大戒論』序を草した道真、一〇世紀には、宋代の士大夫らが始めた念仏結社という、新しい中国浄土教の影響を受けて文人官僚らが参加し創始された勸学会の活動など、願文の作成者である文人官僚は仏教教義や天台教学などに造詣が深かったと推測できる。それとともに、願主の閲覧・認証を経て願文が法会で披露されることを考慮するならば、在家社会でも仏教教義を十分に理解することは必要不可欠であったことが伺えるのである。

おわりに

經典に記されていた五障や女性蔑視的と捉えられていた文言は、仏敎による女性差別を意味するものではなかった。五障は悟りの妨げや煩惱という意味で一貫しており、その言葉を女性が用いるのは、真理の完成者である仏に対し、自らは未完成な存在（煩惱を有する者）であることを懺悔するために必要であった。同時に、五障という言葉がもつ童女の即身成仏を想起させる意味に着目したと考えられる。そして願文には、男女に関係なく誓願を立て、利他行を実践することが最も重要であるという共通認識が記されていた。その認識は、自己が煩惱という意味での五障を持つと自覚し、仏に懺悔すること、童女のように菩提心を発せば即身成仏が実現されるとする智願によって確立された『法華経』理解が、中国・日本に普及していった結果と考えられる。とくに女性は、五障や童女といった言葉を積極的に願文に用いたのは、現世と来世を通してより完全な利他行を行うという目的のためであった²⁴⁾。

以上のように平安期の人々は、「女性は五障だから成仏できない」という考えは持ち合わせていなかった。むしろ問題は、仏敎が女性を差別しているか否かというこれまでの議論が、男女間には客観的な生物学的差異が実体的にあるという近代的思

考の視点でなされてきた我々の側にある。様々な学問分野の中で議論されてきた男女の間の客観的・生物学的差異や男女差別は、男女双方が同じことが出来なくてはいけない、もしくは男女間には絶対的平等があるという近代的思考を思想背景に誕生した概念であり、近代社会でのみ通用できる問題である²⁵⁾。

重要なのは、願文にも記されていたように、前近代社会ではすべての人に身分と役割が割り当てられ、すべての人が相互に依存しないと生きていけないような社会を構築していたことへの理解である。このように社会のあり方は、現在でもさまざまな地域で生きているし、女性たちによって支持されていることを軽視してはいけない。

②「安氏諸大夫先妣の為の法華会を修する願文」で「生の生たる所以や、天地に始まり、父母に終ふ」と母から子へ託された一文からも、出家者だけでなく在家者の中で、一切衆生が相関わりあいながら生起するという仏敎の根本思想である縁起の相互依存の関係が十分に理解されていたことが伺えるであろう。このような関係性の中で生きる前近代社会の人にとって、仏敎を理解することはそれほど難解なことではなかったのである。

註

(1) 川口久雄校注『菅家文章・菅家後集』（日本古典文学大系

七二)。旧字体は新字体に改めた。願文は在家者の中で仏教がどのように理解されてきたのかを知る有益な史料といえる。工藤美和子『平安期の願文と仏教的世界観』（思文閣出版 二〇〇八年）参照。

- (2) 笠原一男『女人往生思想の系譜』（吉川弘文館、一九七五年）、岩本裕『仏教と女性』（第三文明社、一九八〇年）、西口順子『女の力―古代の女性と仏教』（平凡社、一九八七年）、大隅和雄・西口順子編『シリーズ女性と仏教』全四巻（平凡社、一九八九年）、日本仏教学会編『仏教と女性』（平楽寺書店、一九九一年）、平雅行『日本中世の社会と仏教』（塙書房、一九九二年）、勝浦令子『女の信心―妻が出家をした時代』（平凡社、一九九五年）、西口順子編『仏と女』（吉川弘文館、一九九七年）、総合女性史研究会編『女性と宗教』（日本女性史論集五、吉川弘文館、一九九八年）、吉田一彦・西口順子・勝浦令子『日本史の中の女性と仏教』（法蔵館、一九九九年）、勝浦令子『日本古代の僧尼と社会』（吉川弘文館、二〇〇〇年）、田上太秀『仏教と女性―インド仏典が語る』（東京書籍、二〇〇四年）等を参照。

- (3) ブライアン・小野坂・ルパート「恩をめぐる語りと変遷―中世前期の日本仏教再考のために」（『文学』二〇〇七年一二・一月号）。
- (4) 東館紹見「天曆造像と応和の大般若経供養会―社会・国家の变化と、興隆・呼応の場としての講会の創始」（伊藤唯真編『空也』日本の名僧五、吉川弘文館、二〇〇五年）。
- (5) 大正蔵第二巻・No.九九・一八九頁下。
- (6) 大正蔵第一一巻・No.三二〇・一六頁上。
- (7) 大正蔵第三〇巻・No.一五七九・八六六頁上。

平安期における女性と仏教について（工藤美和子）

- (8) 坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』（岩波文庫）。
- (9) 植木雅俊『仏教のなかの男女観』（岩波書店 二〇〇四年）。
- (10) 兼子鐵秀「安然和尚の法華龍女成佛義」（叡山学院研究紀要）一〇号 一九八九年、大久保良峻「天台教学における龍女成仏」（『日本仏教総合研究』四号 二〇〇五年一月）。

- (11) 大正蔵第三三巻・No.一七一六・六八二頁上。
- (12) 大正蔵第三三巻・No.一七一七・八一九頁上。
- (13) 日本大蔵経第七七巻・一四九頁。
- (14) 大正蔵第七四巻・No.二三六六・二六四頁中。
- (15) 大正蔵第五七巻・No.三二〇一・二頁下。
- (16) 大正蔵第五六巻・No.二一九六・四八三頁中。
- (17) 大正蔵第一六巻・No.六六五・四二五頁中。
- (18) 大正蔵第五六巻・No.二一九六・六四八頁中。
- (19) 大曾根章介校注『本朝文粹』（新日本古典文学大系二七）。
- (20) 尊子『菩薩の化身は、園城寺の学僧千観（九一八〜九八四）』『十願発心記』「第二願」の極楽浄土に往生し不退転の菩薩と成って還相廻向するという利他行と共通している。二葉憲香「空也浄土教について―千観との共通性を通じて」（藤島宏達・宮崎圓道編『日本浄土教史の研究』平楽寺書店、一九六九年）、佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、一九七九年）、岩田茂樹「上品上生来迎図の成立―その思想と性格」（『文化学年報』第三六号、一九八七年三月）を参照。
- (21) 六地藏寺本叢刊第三巻『江都督納言願文集』（汲古書院、一九八四年）引用。なお、平泉澄校勘『江都督納言願文集』（至文堂、一九二九年）も適宜参照した。
- (22) 新訂増補国史大系第三〇巻。
- (23) 小原仁『文人貴族の系譜』（吉川弘文館、一九八七年）、吉村

稔子「三千院阿弥陀聖衆來迎図考―來迎図の成立に関する一考察」〔美術史〕一六一号、二〇〇六年一〇月。

(24) 野村育世氏は、鎌倉期以降は願文・表白・寄進状の中で男性願主（施主）が積極的に五障や童女に自らをなぞらえ成仏を願うという内容が多く記されるようになると指摘されている。野村育世『仏敎と女の精神史』（吉川弘文館、二〇〇四年）。

(25) ジェーン・W・スコット『ジェンダーと歴史学』（荻野美穂訳、平凡社、一九九二年）、上野千鶴子「歴史学とフェミニズム―「女性史」を超えて」（岩波講座『日本通史・別巻一』岩波書店、一九九五年）、稲城正己「菩薩のジェンダー―菅原道真の願文と女人成仏」（朝枝善昭先生華甲記念論文集刊行会編『仏敎と人間社会の研究』永田文昌堂、二〇〇四年）。

（くどう みわこ 嘱託研究員）

二〇〇九年十一月十日受理

〈Summary〉

Buddhism and Women in the Heian Era: Ganmon

KUDOH Miwako

This article is to discuss the problem between women and Buddhism in the Heian Era by a discussion of the term 五障, which means five obstacles of women. 五障 is written down in the Lotus Sutra, which is considered as sexism conventionally. The problem of the difference (gender) between men and women is discussed in modern society. In spite of this, an obstacle exists in understanding the situation of the women in the Heian Era. This problem is discussed in two ways:

- ① A study of this term in the Lotus Sutra and its interpretation.
- ② A reconsideration of the original meaning and the meaning of 五障 written in the document of the oath to Buddha and in the documents of the vow of 五障 in the Heian Era.

I want to reconsider the meaning of the words called 五障 mainly as to the above-mentioned two points. And I want to consider what kind of understanding was held about the role of the Buddhism of women in the Heian Era.

It will develop that the women of the Heian era did not suffer sexism by the above-mentioned point of view. And I offer a new viewpoint about the role (positioning as Buddha and the Bodhisattva) that women were assigned.

Key words: women, Buddhism, vow

